



TITLE:

第二次世界大戦期の国際決済銀行 (5) 一国際決済銀行とアメリカ経 済外交の二重性（その1）－

AUTHOR(S):

西牟田, 祐二

CITATION:

西牟田, 祐二. 第二次世界大戦期の国際決済銀行(5) 一国際決済銀行と
アメリカ経済外交の二重性（その1）－. 経済論叢 1999, 164(1): 1-30

ISSUE DATE:

1999-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/45286>

RIGHT:

經濟論叢

第164卷 第1号

第二次世界大戦期の国際決済銀行（5）……………西牟田 祐 二 1

相関次元を応用した
金融時系列の非線形性検定……………足 立 光 生 31

持株会社の会計問題と会社法規定……………金 森 絵 里 50

閉鎖集団における主体の依存関係の均衡（2）…藤 山 英 樹 67

国民健康保険制度に関する経済分析（1）……………小 松 秀 和 82

平成11年7月

京都大學經濟學會

第二次世界大戦期の国際決済銀行（5）

——国際決済銀行とアメリカ経済外交の二重性（その1）——

西 牟 田 祐 二

I BIS 総裁のアメリカ合衆国往復

1942年の夏から秋にかけての時期マッキトリックの総裁職の任期延長によって BIS の枠内での諸中央銀行間協力はこれまでで最も大きなテストをクリアした。マッキトリック自身はその時には既にバーゼルを一時離れていた。彼は1942年10月末にスイスを離れ、半年後の1943年5月7日にバーゼルに戻ってくる。ロンドン、ニューヨーク、ワシントンへの旅行を彼は BIS の第二の三年間の総裁としての任期の条件としたのである。かれはそれによってアメリカ合衆国において資格認定を得、自らの身を守ることを実現しようとしたのである。合衆国スイス大使リーランド・ハリソンは1942年9月1日に以前はただ暗黙のうちに与えられた合衆国国務省の彼の BIS 総裁職への在任の承認を終局的に文書によって確証した¹⁾。それにもかかわらずマッキトリックは「石橋をたたいて渡り」、この承認をワシントンとニューヨークでもう一度自ら個人的に確認しようとしたのである。

1942年10月27日マッキトリックはジュネーブからスイスを出発し、当時まだ占領されていなかったフランス南部地域を通してスペインのバルセロナに着き、そこからさらにマドリッドを通してリスボンに至った。「私がそこに到着するとホテルである人が私に話しかけてきた。あなたはトム・マッキトリックさんではありませんか？ 私が肯定すると、ほとんど信じられないといったよう

1) McKittrick Collection (以下 MC と略記) , Brief Jerome K. Huddle an McKittrick, 1. 9. 1942.

な顔をした。彼はちょうどスイスへ行く途中で彼がスイスで一番最初にコンタクトを取りたかったのは私だというのだ。」とマッキトリックは1964年にオーラル・ヒストリー・インタビューの中でこう回想している²⁾。ここで彼とはアレン・ウェルシュ・ダレス Allen Welsh Dulles であり、アメリカ合衆国の新しい戦時政府機関である Office of Strategic Service (OSS) の事務所主任としてスイスのベルンに向かう途中だったのだ³⁾。マッキトリックの方はリスボンからさらにロンドンに飛び、そこでイングランド銀行総裁モンタギュー・ノーマンと理事のオットー・ニーメイヤー卿は彼にイングランド銀行の完全な支持を保証した。同じ事はイギリス蔵相にも当てはまった。蔵相キングズレー・ウッズ卿 Kingsley Woods はマッキトリックのロンドン到着のほんの少しまえイギリス下院で労働党議員の攻撃に対して BIS を擁護している。その際蔵相は BIS の中立性を強調し、どの戦争同盟も他の犠牲のもとに経済的ないし金融的利益を得てはいないと言っている。BIS の中立性はイングランド銀行の構成員としての存在とアメリカ合衆国人の総裁によって保証されているのだ。ライヒスバンクのバーゼルにおける役割は受動的であり、しかも正しい態度だ。イギリスはバーゼルからの撤退によってただ失うものがあるだけだ。もしそうすればライヒスバンクは約一億スイスフランのスイスにおける資産を奪ってしまう危険性がある、というわけである⁴⁾。

マッキトリックは彼の BIS への在任についてのイギリスの支持を確保した後で、リスボン、ダカル、南アメリカ、バミューダ諸島を経由してニューヨークに着いた。1942年12月のはじめの彼の到着の直後からマッキトリックは講

2) The John Foster Dulles Oral History Collection, Interview McKittrick, p. 23, Microfilm Edition, Mudd Manuscript Library, Princeton University Libraries.

3) ベルンにおけるアレン・ダレスの活動については近年 OSS の文書公開 (Record Group 226, National Archives) によって広範に明らかにされつつある。前述した「ナチ金塊に関するアメリカ政府報告書」(pp. 36-47) においても言及されている。また資料集として Neal H. Peterson (ed.), *From Hitler's Doorstep: The Wartime Intelligence Reports of Allen Dulles 1942-1945*, Pennsylvania, 1996 が公刊された。特に国際決済銀行との関係については後述する。

4) Parliamentary Debates, Tuesday, October 13, 1942, *British Parliamentary Papers*.

演者として熱望される存在となった。IBM 社長のトーマス・J・ワトソン, sr. 等のビッグ・ビジネス界の人々やチェース・バンク頭取のウインスロップ・オールドリッチなど国際銀行家たちは新しいヨーロッパの状況からのホットな情報に多大の関心を寄せた。「BIS のアメリカでの受け入れにとってはこれらの講演は大変有益であった。」とマッキトリックはのちに書いている。「というのもレオン・フレーザー以外にはウォール・ストリートでは、ニューヨーク連邦準備銀行の若い人も含めて、BIS が何であり、誰が主導しており、なぜそれが存続しているのかについて正確に理解している人は少なかったからである。」⁵⁾

BIS 総裁の方もニューヨークでいくらかのことを知ることができた。まず第一に彼は戦後の世界通貨関係の新秩序についての二つのプランについて聞き知った。すなわち、BIS 敵対者で、財務長官ヘンリー・モーゲンソー, Jr. の右腕のハリー・デクスター・ホワイトの作った「ホワイト案」とイギリス大蔵省の専門家ジョン・メイナード・ケインズが作った「ケインズ案」である。その完全な全文をマッキトリックは入手しなかったが⁶⁾、「しかし私の知る限りでは、両プランは世界的規模の、それに所属する信用機関を持った、中央決済機構を設立すること、それによって国際的な貿易差額の赤字分を決済するということを求めているようである。」このプランの中の再組織された BIS のチャンスをマッキトリックは「世界的規模の固定相場通貨規制のヨーロッパ地域機関として見た。」⁷⁾ これはバウル・ヘビラーがかれの1941年1月の覚え書きの中で戦後の BIS 役割について書いていたのとはちょうど逆である。すなわち、ヘビラーは、その役割をヨーロッパの決済機構として見ていたのではなくて、ヨーロッパ、アジア及びアメリカなどの様々な広域経済圏の間の媒介機構とし

5) MC, Brief McKittrick an Oscar (Otto ?) Niemeyer, 23. 3. 1943.

6) 全文の入手はベル・ヤコブソンが行ない、すでに1943年5月にはライヒスバンク (エミール・プーレル)、ドレスデン銀行 (カール・ゲーツ Carl Goetz)、ドイツ銀行 (ヘルマン・ヨセフ・アプス) にも伝えられている。(Die Deutsche Bank 1970-1995, München 1995, S. 337.) 彼らは5月にチューリッヒで6月にはベルリンでケインズとホワイトの戦後世界通貨構想について議論した。(Edenda, S. 337-338.)

7) MC, Brief McKittrick an Niemeyer, 23. 3. 1943.

て見ていたのだった。だが考え方の違いはそこにとどまるものではなかった。それについては行論のうちに明らかとなる。

マッキトリックのニューヨーク滞在は彼の戦後への職業的なキャリアにとっても大変収穫があった。ロックフェラーのパートナーでチェース・バンク頭取としていまやウォール・ストリートのナンバー1とも言えるウインスロップ・オールドリッチは、マッキトリックにチェース・バンク副頭取かつヨーロッパ業務担当のポストを申し出たのである。当然のことながら彼はこの機会を逸せず、すぐにロンドンのニーメイヤー卿に対し自分は戦後すぐに BIS 総裁を退任するつもりだと知らせている⁸⁾。ニューイングランドで家族といっしょの少し長いクリスマス休暇を取った後マッキトリックはついに2月のはじめにワシントンへ来た。そこでは彼はウォール・ストリートとは反対にきわめて冷淡に迎えられた。財務省ではモーゲンソーもホワイ特も彼を歓迎しなかった。そしてこの省のミドルの地位にあるひとに働きかけてニューヨークにおける BIS 資産のブロック解除を達成しようとする彼の試みは成果ないままに置かれた。同様に連邦準備制度及び商務省の代表との会話も非生産的に推移した。

国務省ではマッキトリックはいくらかのより良い幸運を手にした。そこでは国務長官のコーデル・ハルが短い表敬訪問で彼を歓待し、ハルの右腕のレオ・パスヴォルスキー Leo Pasvolosky および主任官僚のエレノア・ダレス Eleanor Dulles がマッキトリックに BIS についての詳細な報告をする機会を与えた。エレノア・ダレスの BIS 総裁との会話への関心は大変大きかった。なぜなら彼女は1930年にハーバード大学での研修の際に当時新たに設立された BIS に関する900ページを超える長大な博士論文を書いていたからである。それに付け加えてダレス女史は BIS の事柄に関していささか家族的にも関係があった。次兄のアレン・ダレスは、合衆国の戦時機関 OSS のスイス事務所の新主任であり、リスボンで道中マッキトリックに「遭遇」したものであるが、かれは BIS について極めて高い関心を持っていた。また長兄のジョン・フォス

8) MC, Brief McKittrick an Niemeyer, 23. 3. 1943.

ター・ダレスは、ウォール・ストリート法律事務所サリヴァン&クロムウェルの主宰弁護士であり、司法省を相手として BIS の利益を弁護する側に立っていた。元 BIS 総裁で現ファースト・ナショナル・バンク・オブ・ニューヨーク頭取のレオン・フレーザーは J. F. ダレスと 1942 年に BIS の配当金の支払いについての許可授与の拒否に対する訴訟のために契約していた。その際 J. F. ダレスは、BIS からの委任は商業的な業務の問題にとどまらず、「国際的礼儀に属する事柄だ」と強調している⁹⁾。

1943 年 2 月 4 日におけるエレノア・ダレスとのインタビューでマッキトリックは BIS の活動についてのひとつの正しくない、あるいは嘘の、話をしている。虚偽の核心は、ライヒスバンクが BIS の活動から引き出している有利な点を覆い隠すことにあると言えるだろう。三回にわたって BIS 総裁はワシントンの主任女性官僚に対して面と向かって嘘をついていると指摘できる。マッキトリックの最初の嘘は、「BIS はポルトガル・エスキュード建てで枢軸諸国の口座のための取引を実行してはいない。というのはこうした業務が論争を呼び起こす可能性がある」とわれわれは意識しているからだ。¹⁰⁾ 真実は次の通りである。BIS は 1941 年秋から 1942 年 2 月の間 20 トンを超えるドイツの金（慎重なポルトガルは戦後における連合国の返還要求を予測して支払い用としてこれを受け取ろうとはしなかった）をスイスにおいてスイスフランとポルトガル・エスキュードに代えること、またこの外国為替をもってスイス国立銀行を使って再び金を買うこと、またこの金について輸送専門家としての BIS の力でリスボンのポルトガル銀行への輸送を組織すること、で決定的に協力したのである。マッキトリックの次の嘘は、「枢軸諸国は今日まで彼らの BIS への利子を外国為替、とりわけスイスフランで支払っている。」真実は、枢軸諸国は彼らの利子を 1939 年秋の戦争勃発以降金で支払っている。第 3 の嘘は、「BIS は戦

9) MC, Brief Leon Fraser an McKittrick, 6. 10. 1942.

10) National Archives of the United States, RG59, Department of State, 462. 00R296BIS/2-543, Interview with President McKittrick, Feb. 5, 1943, Statement of Mr. McKittrick: The present position and role of the BIS, Feb. 18, 1943.

争勃発以後に設立された機関と何ら取引を行っていない。」真実は、BISは占領地域のそうした機関や第三帝国と結び付いている諸国との間で関係を形成している。たとえば、ブリュッセルの証券発行銀行やブリュッセル赤十字機関やあるいはブダペストの貨幣中央機関などである。

更なるマッキトリックの言明は、ライヒスバンクはBISを経済戦争の道具として見ているのではなく、将来のヨーロッパの再建のための機関として見ているなどであった。その際彼は、彼もまた引き続き枢軸諸国と連合諸国との「交渉による平和」ということから考えを出発させているということを言外に示しているのである。しかもこれは、アメリカ合衆国大統領ルーズベルトとイギリス首相チャーチルが一ヶ月前にカサブランカで第三帝国の無条件降伏が戦争目標であると確定したにもかかわらずであった。

国務長官ハルは帰任に賛成

BIS 総裁は部分的には嘘をつくことで国務長官ハルを、彼のバーゼルへの帰任がアメリカ合衆国の国益に合致すると納得させることができた。ハルはマッキトリックの外交官パスの有効期限を延長し、ポルトガルとスイスのヴィザの獲得を助けた。合衆国国務省はただし大西洋を渡る帰路をマッキトリックのために組織することはしようとはしなかったし、できもしなかった。民間人にとっては1943年の3月という時期においては政府の許可なしにはリスボンへの航空券を手に入れることはほとんど不可能であったので、マッキトリックはOSS 長官のウィリアム・ドノヴァン将軍 William Donovan に助けを求めた。

「私は、私の占くからの知り合いのビル・ドノヴァンのところへ行き、自分の問題を話した。ビルは言った。『トム、問題ないよ。私が君にチケットを世話しよう。』一週間後もう一度彼のところへいくと、かれは『私が何とかする』と再度言う。結局私は、私がバーゼルに戻るのを邪魔しているアメリカ人の誰かがいると悟った。』¹¹⁾

11) Oral History Interview McKittrick, p. 24.

彼の帰任へのサボタージュをマッキトリックはモーゲンソーとホワイトの策謀に帰した。「二人の卑劣な人間が私と BIS を憎んでいた。しかし幸運にもわたしは帰任の行程をモーゲンソーの不気味な仲間に割り当てられはしなかった。」¹²⁾ 結局のところ如何にしてバーゼルへの帰航を彼が成功させたかを、マッキトリックはオーラル・ヒストリー・インタビューの中で次のように語っている。「わたくしはバーゼルとコンタクトを取ることができ、われわれの総務ラファエル・ピロッティがわたくしに、ドイツが全フランスを占領して以来ジュネーブを通る道が閉鎖された後でどのようにスイスへ入ることができるかを知らせてきた。わたくしはリスボンへ行き、そこでイタリア大使に申し込む。彼は国営のイタリア航空会社にすでに予約しているローマへのチケットを持っている。そこへの行程に関してはワシントンのイギリス大使がわたくしにボルティモアからバミューダ諸島経由でリスボンに向かうイギリスのクリッパーの中の一席を世話したのである。そこからわたくしはイタリア航空でローマに行き、ローマでイタリア銀行に王侯のような歓待を受けた。ピロッティもそこにて、まもなくバーゼル行きの列車に乗った。そしてバーゼルにわたくしは1943年5月のはじめに着いたのだ。」¹³⁾

II 1943年-1945年の BIS

ライヒスバンクのための最後の貢献

BIS 総裁がアメリカで半年間を過ごしている間にヨーロッパは戦争の転換点を経過していた。マッキトリックが1942年10月にスイスを出発した時ヒトラーはその権力の頂点にいた。そしてゲッベルスやヒムラーといった熱狂的な確信的ナチスだけでなく、合理的に考えるドイツの経済エリートの大部分もまた、その最終的な勝利の幻想を確信していた¹⁴⁾。それから1942年11月には北ア

12) *ibid.*, p. 32.

13) *ibid.*, p. 32.

14) *Die Deutsche Bank 1870-1995*, S. 356.

フリカに英米軍が上陸した。また1943年1月の終わりにはソヴィエト赤軍がスターリングラードで勝利を収めた。マッキトリックが1943年5月にバーゼルへ帰ってきた時、ヒトラーは既に戦争に敗れていた。

連合国の警告

1943年1月5日連合国はロンドンで作成された公式の声明で中立諸国に「ナチスの金の受け取り」についての警告を発した。声明は中立国の責任ある政府官庁に支払いに提示されたナチスの金を特定するためにあらゆる事を行うこと、そしてそれを拒否することを求めている。第三帝国によって「非合法に取得された金」のすべては戦後に返されねばならない¹⁵⁾。この警告の結果スイス国立銀行はBIS業務に関する彼らのコントロールを強化し、それによってBIS銀行部門の効率的な仕事の一部困難になった。二つの例がある。1943年3月3日にジュネーブのミラバウト・フィルズ& Co. 個人銀行が、「BISにあるブルガリアの会社の支払いのために金11座を受け入れることは許されるか。金はBISから供給されるだろう。」¹⁶⁾と問い合わせた。スイス国立銀行はこれに答えて「原則的には良い。しかしまずBISに問い合わせるべきだ。」このあと時間のかかる検討を経た後やっと金がBISからジュネーブに入った。他のケースではスイス国立銀行は拒否権を発動した。パウル・ヘヒラーが、もしBISからスイス・クレディット・アンシュタルトに100万スイスフランの11座を作ったとするとスイス国立銀行はこれに対し何らかの異議を唱えるか、と問い合わせた時、かれは、「これはスイス国立銀行に何の便宜もない」¹⁷⁾という回答を得たのだ。

15) MC, Joint allied declaration released in London, Warning to the Neutrals to accept Nazi-gold 5. 1. 1943.

16) Schweizerische Nationalbank, *Direktoriatsprotokoll*, 1. Halbjahr 1943, 3. März 1943, S. 227, in G. Trepp, *Die Bank für Internationalen Zahlungsausgleich im Zweiten Weltkrieg*, Zürich 1996, S. 118.

17) Schweizerische Nationalbank, *Direktoriatsprotokoll*, 2. Halbjahr 1943, 23. Sept. 1943, S. 1011, in G. Trepp, a. a. O., S. 118.

ルーマニア業務の終焉

この連合国の警告にもかかわらず BIS はライヒスバンクの金支払い場所として依然として機能し続けた。最後の大きな金回転業務は1943年春から1944年3月にかけてのドイツのルーマニアへの金譲渡の手助けであった。この金供給の経済的な背景はドイツとルーマニアとの結合を確保しようとするドイツの努力であった。スターリングラード以降ルーマニアの独裁者アントネスク Michael Antonescu はルーマニアの石油供給をベルリンのドイツ清算勘定においてライヒスマルクの貸し方を以って支払うことを次第に断るようになり、スイスにおけるスイスフランあるいは金を要求した。

戦争のはじめの二年間に BIS におけるルーマニア国立銀行の金口座はほんのわずかな出し入れを示していたに過ぎない。ライヒスバンクが数百キログラムの金送金をしていただけである。1942年8月25日約3トンの金のベルンからブカレストへの現送が起きた。1943年末までにライヒスバンクはスイス国立銀行にあるルーマニア金保管庫を計12回の送金でもって再び満たした。1944年3月22日にはルーマニア国立銀行はかれらの BIS 金保管庫を二回めに空にした。今回はかれらは5.5トンの金延棒（価値にして2800万スイスフラン）を支払ったが、しかし物理的にブカレストに移動したのではなく、たんにスイス国立銀行金保管庫のなかで手押し車で移動したに過ぎない¹⁸⁾。

ルーマニアの金の BIS からの移転には非常に忙しい3週間が先行していた。1944年3月はじめにスイス国立銀行はルーマニア国立銀行の勘定で1000万スイスフランの額の SBG (スイス銀行) から BIS への送金に気づいた。これに対してスイス国立銀行総裁エルンスト・ヴェーバーはマッキトリックに介入し、もう一度次のことを強調した。「現在ある規定に従えば BIS はスイス国立銀行の承認がある場合にのみスイスの民間銀行とスイスの通貨で業務ができるのだ。」¹⁹⁾

18) MC, Zusammenstellung über die Verwendung des der BIZ auftrags der Reichsbank von der Schweizerischen Nationalbank übertragenen Goldes von Walter Thiersch, 10. 1945.

19) Schweizerische Nationalbank, *Direktoriumsprotokoll*, 1. Halbjahr 1944, 14. März 1944, S. 299, in G. Trepp, a. a. O., S. 119

ヴェーバーはマッキトリックに、ルーマニア国立銀行の1000万スイスフランはライヒスバンクのスイス国立銀行への金売却に由来するものだと知らせた。さらにスイスはこうした外国の発券銀行のスイスフラン預金は、とりわけそれがライヒスバンクの金譲渡によって生じた場合には、もはや容認できないとマッキトリックに語った。さらにヴェーバーは、BIS 総裁に1500万スイスフランのスイス短期国債をエクスリン兄弟銀行から購入することを禁じた。BIS を通じての外国中央銀行のスイスフラン資産への利子を生む投資は望ましくないというわけである。

マッキトリックは結局いやなことを笑ってこらえる以外にはなかった。そしてスイス国立銀行の立場への理解を示した。彼は、スイス銀行にある BIS 口座のルーマニア国立銀行の1000万スイスフランから彼らの600万スイスフランを払い戻すことに賛意を表した²⁰⁾。マッキトリックのスイス国立銀行に対する譲歩はルーマニア国立銀行には都合がよくなかった。かれらは BIS との関係を中断して彼らの全外国為替と金資産をスイス銀行に預金した。ルーマニアの金をめぐる事件の背後には1944年2月始めにドイツとルーマニアの間で締結された経済協定があった。そこでドイツはルーマニアからの商品購入と引き換えに一億スイスフラン以上を支払う義務があった。このスイスフランをライヒスバンクはスイス国立銀行への金売却によってのみ調達し得た。スイス国立銀行はしかしながらこの目的のためにドイツの金を買うことに何ら利益がなかった。というのも彼らは、いまやこの金をドイツの略奪金として戦後に連合国に供給しなければならないかも知れないというリスクを冒すことになるからである。防衛策としてスイス国立銀行は、ルーマニアがドイツの条約パートナーから対応する金を直接支払手段として譲渡させることを望んだ。スイス国立銀行は喜んで金をルーマニア国立銀行の勘定で自由な保管庫として預かる用意があった²¹⁾。

20) Schweizerische Nationalbank, *Direktoriumsprotokoll*, 1. Halbjahr 1944, 23. März 1944, S. 331, in G. Trepp, a. a. O., S. 120.

21) Schweizerische Nationalbank, *Direktoriumsprotokoll*, 1. Halbjahr 1944, 14. März 1944, S. 281, in G. Trepp, a. a. O., S. 120.

ドイツ銀行との業務の継続

1943年9月1日に BIS はベルリンのドイツ銀行の国際部門担当取締役クルト・ヴァイゲルト Kurt Weigelt の訪問を受けた。ヴァイゲルトは同行の植民地専門家として通っており、さらに1935年以降ナチ党の植民地政策局の経済顧問でもあった²²⁾。ヴァイゲルトは戦時期における BIS の役割についての賞賛する覚え書きを手渡し、そのなかで、BISが政治的ではなく、純経済的な機関であることが実証され、戦後においては国際金融市場の再建に重要な役割を引き受けるべき資格があるということを強調した²³⁾。総裁への儀礼的な挨拶の後ヴァイゲルトはパウル・ヘヒラーに対してはっきりと次のように言った。自分は災害にあったオーストリアおよびハンガリー国債所持者の利益の保護団体の一つである Caisse Commune des Porteurs de Dette Publique Autrichienne et Hongroise の代理人として来ている。この団体は表面上は災害にあった国債の所持者を代表しているが、トゥールーズのフランス銀行（支店）に1.7トンの金を保管している。この金をベルンにあるスイス国立銀行の BIS 信託保管庫に移したい。パウル・ヘヒラーとマッキトリックがこれに対して許可を与えた後1944年1月13日にベルンへのこの金輸送が行なわれた²⁴⁾。

郵便振替 (Postgiro) 業務の増大

1943年のはじめ以降 BIS 銀行部門への管理が強化されるとともに BIS の郵便為替取引額が増大した。諸中央銀行はこの決済制度の中にそれぞれの国の PTT 会社のために金口座を維持しており、そこで国際的な郵便支払取引の残高決済が行なわれる。この制度は1933年にカイロで行なわれた世界郵便会議の協定にもとづいており、1937年4月に BIS を技術的なセンターとして発足し

22) Hildebrandt, Klaus, *Vom Reich zum Weltreich, Hitler, NSDAP und koloniale Frage 1919-1945*, München 1969, S. 190.

23) MC, Expose Kurt Weigelt, 1. 9. 1943.

24) Schweizerische Nationalbank, Archiv Bern, Ahmachungen mit der BIZ, Archivschachtel Nr. 112, in G. Trepp, a. a. O., S. 122.

た。当初よりドイツと並んでスカンジナビア諸国、イギリス、フランスが加盟していた。スイスも1938年の末に加盟した。戦争勃発まではイギリスとフランスは多くの額の利用を示していたが、戦争勃発後は郵便振替決済は事実上ほとんど使われなかった。

1940年41年にはほんのわずかな取引があった後、1942年9月10日スイス PTT はスイス国立銀行に、スロバキアのティソ・マリオネッテ政権が BIS に新たな郵便振替口座を開設できるかどうかを尋ねた。スイス国立銀行はそれを拒否し、PTT に BIS にある自身の決済口座も解消するよう勧めた。じっさいスイス PTT が脱退すると同時に別の国々の郵便会社の BIS 郵便振替口座での取引額が跳ね上がることになった。すなわち1941年から42年にかけての営業年度における23回の総額金12.4キログラムから1942、43営業年の34回の金703.3キログラム（価値にして約370万スイスフラン）に上がり、1943、44営業年には取引額はふたたび回数30回総額金371キログラム（価値にして190万スイスフラン）に下がったが、これらの取引の約3分の2はドイツ・ライヒスポストのハンガリー・ポストに対する支払いであり、残りはとりわけドイツのアルゼンチンとトルコへの支払いであった²⁵⁾。

金回転台の終わり

1944年4月には事実上 BIS 金回転台の停止とともにライヒスバンクの国際的な「腕」としての BIS 銀行部門も活動を停止する。これから1945年の戦争終結まで BIS の対ドイツ業務は本質的に、ライヒスバンクが BIS のドイツへの投資への利子義務の弁済として支払っている毎月の金170キログラム（価値にして約77万5000スイスフラン）の受け取りに限定された。暇になったパウエル・ヘヒラーに仕事を与えてやるためか、マッキトリックは1944年5月15日に BIS の歴史についての処理を行なう委員会を作った。協力者は理事のマーセ

25) MC, Movements of Gold Sight Accounts for Postal Transactions 1941-44 by Roger Aubin, 1. 10. 1944.

ル・ヴァン・ジーランド、外国為替部門主任のヴァルター・ティールシュ、部門長のヴァルター・リンデナウ、ウラジミール・ロンカグリ、フランス人のロイヨットそれにスイス人のベルジヒであった。1944年12月までにこの委員会は数百ページにわたる BIS の設立史の概括を与える「Sommaire Historique」を提出した。

「ナチ金塊でも臭くはない。」

1943年8月フランス銀行総裁イブ・ブレール・ド・ボワサンジュはもう一度スイスに業務旅行を行った。彼の最初の訪問場所は古くからあるジュネーブの個人銀行で、これはフランス革命から逃げてきた貴族たちに確実な避難所を提供してきたものであった。ジュネーブからド・ボワサンジュ総裁はさらにヴァートレンダー・アルペンにあるヴィラーに行ったが、そこでは BIS 総支配人ロジェ・オブワンがちょうど避暑に来ており、そこでオブワンと会談してからチューリッヒに行った。チューリッヒではかれはスイス国立銀行総裁エルンスト・ヴェーバーとスイス諸民間大銀行の代表たちと会談し、それからパリに帰る前の最後にバーゼルのマッキトリックを訪ねた²⁶⁾。

ド・ボワサンジュがジュネーブの個人銀行やチューリッヒの民間銀行代表者たちと何を話したかはわからない。1940年から1944年までのフランス銀行とヴィシー政権の大蔵省の公文書の閲覧の非公開期限は60年であり、したがって2004年にやっとその期限が切れる。ギアン・トレップ氏による特別許可の申し出をフランス文書館の長官は却下したと言う²⁷⁾。これに対してド・ボワサンジュのスイス国立銀行及び BIS への訪問の理由はスイス側資料から明らかになっている。それはベルギーから（フランスを通じて）ドイツが略奪した金をめぐら問題であった。

ド・ボワサンジュ総裁はまさしくスイス国立銀行と BIS の首脳に、フラン

26) MC, Letter de R. Aubin pour McKittrick, 9. 8. 1943.

27) フランス銀行総務秘書官 H. バロウセ氏の1991年12月23日付けトレップ氏宛て手紙による。

ス銀行が1940年11月から1942年5月の間にライヒスバンクに供給したあの198トンのベルギーの金の受け取りを用心するように言うためにスイスに来たのだった。フランス銀行はベルンに相当に大きな金保管庫を維持しているので、ド・ボワサンジュはスイス国立銀行とBISのライヒスバンクのための金回転台としての機能について知らされており、またドイツがベルギーの金をスイス以外のどこにも売ることはできないということをよく知っていた²⁸⁾。

ド・ボワサンジュの警告は1943年夏に北アフリカが決定的にヴィシー政権から離れたことと関連があった。1942年11月8日におけるアメリカ合衆国のモロッコへの上陸以来モロッコとアルジェリアにおける現地総督は次第にヴィシー政権に対して距離を置くようになった。1943年の春、多数の重要人物がヴィシーからアルジェに向けてこっそりと立ち去った。大蔵省の高級官僚であるモーリス・クーヴェ・ド・ムルヴィユ Couve de Murvilleもその一人であり、彼は後にフランス首相になる。1943年6月にはアルジェにおいてついに「共和国準備委員会」(後の共和国政府)が設立される。ここにはクーヴェ・ド・ムルヴィユやその他の転向したヴィシー政府構成員とロンドンへの亡命者およびド・ゴール派(その中にはジャン・モネや二人の将来のフランス首相ルネ・ブレヴァンおよびピエール・マンデス=フランスもいた)とが並んで座った。

フランス銀行総裁は当時はアルジェへ立ち去ることはせず、ペタン將軍と最後まで信頼関係を保ったヴィシー権力層に属していた。結局のところド・ボワサンジュはその高い職を1940年9月にペタン將軍からベルギーの金のライヒスバンクへの供給の際の協力によって得ていたのである。このことをクーヴェ・ド・ムルヴィユもロジェ・オブワンも知っていた。スイス国立銀行にたいしてベルギーからの略奪金を受け取ることを警告することによってド・ボワサンジュはベルギー人への約束破りの汚点から自らを解放することができると

28) フランス銀行はスイス国立銀行に戦争中総額38トンの金を約一億9千万スイスフランで売っていた。Vogler, Robert, "Der Goldverkehr der Schweizerischen Nationalbank mit der Deutschen Reichsbank 1939-1945," in *Geld, Währung und Konjunktur*, No. 1 März 1985.

期待したのである。とくにマッキトリックに対しては彼は自らをナチ批判者としてまた連合国に友好的な同時代人として示そうとしたのである。したがって彼は BIS 総裁には、ベルギーの金のセネガルからベルリンへの輸送は彼とクーヴェ・ド・ムルヴィユによって考え出された「遅延戦術」によって全部で16ヶ月もかかったのだと語った。かつまた彼の友人のクーヴェ・ド・ムルヴィユのヴィシーからアルジェへの逃走は彼の助けによってのみ成功したのだというわけである²⁹⁾。

ロジェ・オブワンにたいしてはド・ボワサンジュはあらゆる自慢はあきらめて、ただ事実に基づいた情報提供だけに自らを限定した。すなわち、フランス銀行は、この間に死亡したベルギー国立銀行総裁ヤンセンの同意なしにライヒスバンクに供給した金をフランス銀行自身の備蓄から補填するつもりだ。もしライヒスバンクがその返還をしなかったとしてもである。ライヒスバンクがベルギーの金を BIS かあるいは他者にさらに渡しているのなら、フランス銀行はそのすべての金の返還を求めることになる³⁰⁾。ド・ボワサンジュが帰った後すぐロジェ・オブワンはマッキトリックに会い、ライヒスバンクから受け取ったベルギーからの略奪金のすべてを議論の余地なく返還した方が良いと迫った。

「スイス国立銀行と同様にわれわれはその所有権がのちに第三者から疑わしいと問題にされるような可能性があるどんな金も受け取らないように注意しなければならない。当然のことながらドイツの金譲渡の際にはバウル・ヘヒラーにそのつど頼んで、彼のベルリンの友人に影響を与えて BIS に異論の余地のない金だけを供給するようにさせることが必要だ。他面においては、金は合法的な支払手段であり、我々は債務者にこの形態での利子支払いを基本的には拒否しないという原則を確定することも必要だ。」さらにロジェ・オブワンは BIS 総裁にライヒスバンクの利益のための BIS の金回転台業務のリスクについて

29) MC, Memo McKittrick about Gold from Germany, 11. 8. 1943; Discussion McKittrick with Auboin on Belgian Gold, 17. 8. 1943.

30) MC, Letter de R. Auboin pour McKittrick, 9. 8. 1943.

も警告をした。「ライヒスバンクから安価な金を購入してルーマニア国立銀行により高く売ることにはたしかに大変利益の上がることだが、しかし今日の状況の下では収益性の考慮は後回しにしなければならない。我々はまた我々のドイツへの投資に対する利子に関して金による支払いからスイスフランによる支払いに転換させることを試みるべきだ。ライヒスバンクに対してはこの点でもっともだと思わせる理由付けを持たねばならない。他方でスイス国立銀行は以前から我々の金業務を制限しようと望んでいる。」

1943年8月には、アルプスの清んだ空気の中でロジェ・オブワンは、ドイツに友好的な BIS 銀行部門の活動についての新しい洞察に導かれたようである。この洞察からの成果はしかしながらすぐには何もなかった。すでに述べたようにベルリン—BIS—ルーマニアの金回転業務は1944年の3月まで続き、ライヒスバンクはその利子を1945年4月まで引き続き金で支払った。

ド・ボワサンジュは BIS と同様に、スイス国立銀行総裁ヴェーバーにもベルギーからの略奪金の受け取りについて警告を行った。そのさい彼はこの金の略奪の際のフランス銀行の協力を次のようなコメントで強く否認した。「フランスへの侵略以降ベルギーの金に何が起きたかは私は知らない。」³¹⁾ スイス国立銀行総裁ヴェーバーはしかしながらドイツの略奪金についての警告に何ら聞く耳を持たなかった。そしてこうした金のフランス銀行への返還の要求を厳格に断った。BIS とまったく同じくスイス国立銀行も1943年夏から戦争終結までなお多数のトン数のベルギーからの略奪金を受け取り続ける。彼らは戦後には再びこれの返還を迫られる。これについては後述する。

スイス国立銀行総裁ヴェーバーの論理は以下のものであった。「スイスは金本位通貨を持っている。スイス国立銀行はそれゆえあらゆる国から金を受け取り、またあらゆる国へ金を渡す。金の受け取りを個々の国に対して拒否することは不可能である。それはまたスイスの中立性とも矛盾する。ちなみにスイス

31) Schweizerische Nationalbank, *Direktoriumsprotokoll*, 2. Halbjahr 1943, 12. 8. 1943, S. 820, in G. Trepp, a. a. O., S. 132.

国立銀行はドイツ・ライヒスバンクから売られた金をそれがどこから来たかをしげしげと見ることはできないだろう。スイス国立銀行は、彼らがライヒスバンクから受け取った金はいずれ自身の所有物であると見なし、それを自由に処分できると見なす。スイス国立銀行は(1943年夏までに)価値にして一億スイスフランになる金をフランス銀行からも受け取っているが、そのさいそれが本当にフランス銀行の金かどうかを問い合わせたりはしていない。」

終戦直後スイス国立銀行は、かれらは戦時期にライヒスバンクから約240トンの金(価値にして約12億スイスフラン)を「善意の取得」で受け取ったのであり、それは合法的なドイツの戦前からの資産だと見なされたのだ、と主張した。1985年になってスイス国立銀行から出版された「1939年から1945年までのスイス国立銀行のライヒスバンクとの金取引についての研究」も、疑問符をつけてではあるが、やはり同じ結論を出している。ヴェーバーがフランス銀行総裁のベルギーからの略奪金の受け取りへの警告を拒否した際の論理のから見ると、この「善意取得」のテーゼは維持できない。

ロンドン及びニューヨークにおける BIS 批判の増大

1939年のチェコスロヴァキアの金事件以来ポール・アインツィッヒはロンドンの『フィナンシャル・ニュース』紙³²⁾で出版界における BIS 批判者として活動していた。ロンバード・ストリートにおける定期的なコラムやたくさんの記事で彼は戦争以降再三にわたって BIS 批判の論陣を張ってきた。先に言及した1942年10月に英蔵相キングズレー・ウッズが労働党からの激しい批判に対して BIS を擁護した時にはアインツィッヒは6つ以上の BIS に関する記事を掲載した。その中でかれは BIS の1941、42年度年報をナチスの広域経済圏の路線にあるものとして批判し、イングランド銀行の BIS からの脱退を要求した³³⁾。

32) この『フィナンシャル・ニュース』紙は1946年に『フィナンシャル・タイムズ』紙と合併する。

33) Papi, Giuseppe Ugo, *The First Twenty Years of the Bank for International Settlements*, Rome, 1951, p. 252.

ちょうどその時ロンドン及びアメリカ合衆国への旅行を準備していた BIS 総裁マッキトリックはアインツィッヒの批判にショックを受けた。ロンドンへの電報による警告で彼は、イングランド銀行の BIS からの脱退がいかなる結果をもたらさざるをえないかをありありと描いて見せた。「そうすればドイツは BIS をかれらの新ヨーロッパの金融機関としてはめ込むだろうし、それをこえてスイスにある BIS の一億スイスフランの資産を自分のものにするだろう。この厄介なジャーナリストはロンドンの金融界で厳格な中立的機関として受けとめられている BIS のあらゆる努力を無に帰せしめる恐れがある。」³⁴⁾

イギリス蔵相が下院の議論で BIS への批判をはねつけたにもかかわらず、1942年から1943年にかけての冬には BIS におけるイングランド銀行の役割がイギリスの新聞紙上で戦争勃発以来初めて広範に議論されることになった。主導的な経済紙である『フィナンシャル・タイムズ』と『フィナンシャル・ニュース』はその際トーンがまったく同じではなかった。『フィナンシャル・ニュース』が BIS からのイングランド銀行の脱退を要求しているのに対し、政府により近い『フィナンシャル・タイムズ』は懸念のある問題に自らを限定していた³⁵⁾。ドイツでは『フランクフルター・ツァイトウング』紙が BIS をアインツィッヒ及び英労働党議員の攻撃に対して擁護している。「BIS は厳格に中立である」と、同紙は「BIS へのイギリス紙の攻撃」をはねつけている。「BIS は存続しなければならない。なぜならそれは戦後においてなお必要とされるからだ。ちなみに BIS への攻撃はとりわけイングランド銀行総裁に対するひとつの陰謀から生じている。『フィナンシャル・ニュース』の発行人はモンタギュー・ノーマンをやめさせようとし、この目的のために一人の労働党議員に下院で BIS への攻撃を組み立てさせたのだ。」³⁶⁾ もうひとつのドイツの出版物、ナッハリヒテン・フュア・デン・アウセンハンデルは「BIS に対す

34) National Archives of the United States, RG84, Foreign Service Posts, 462, 00R 296BIS/1169.

35) Papi, Giuseppe Ugo, *The First Twenty Years of the Bank for International Settlements*, Rome, 1951, pr. 252f.

36) *Frankfurter Zeitung* vom 3. 10. 1942.

るブラックリストの適用はない」というタイトルのもとでイングランド銀行の BIS への加盟存続について書いている³⁷⁾。

スイスの新聞にもロンドンでの BIS 論議の反映が見られた。『スイス商業新聞』は BIS を「光のもれた攻撃」という大見出しで『フランクフルター・ツァイトウング』と同様の議論を以って擁護している³⁸⁾。他方『ノイエ・チューリッヒャー・ツァイトウング』は上品な抑制を利かせ、コメントなしでイギリス蔵相の BIS 擁護とロンドンの新聞の批判記事の両方を載せている³⁹⁾。

1943年1月14日にアインツィッヒはひとつの BIS の発行した出版物を論難した。これは外国為替管理規定を国ごとにまとめたものである。イギリスの外国為替規定は68ページの分量でただ不完全に示されているだけで、他方ドイツのためには600ページを割いて包括的に扱っている、とアインツィッヒは批判する。「これは、ドイツと取引をしている企業にとっての有益なハンドブックであり、またイギリスとアメリカのブラックリストに載っている企業にとっての良いハンドブックだろう。」⁴⁰⁾ 1月19日にはアインツィッヒは二倍の分量の記事を書き、イギリスの最高金融界で広まっているドイツの最高金融界のある種の要素（例えばヤルマル・シャハトやエミール・プールといった人々）は根本的にはヒトラーに距離を置いており、抵抗のための譲歩が獲得される可能性があるという見解を激しく批判した。アインツィッヒの論説は次の言葉で締めくくられている。「ヒトラーの銀行部門における予備師団は、彼の正規の国防軍師団における虐殺者とまったく同じく世界平和に協力しない。」⁴¹⁾

37) *Nachrichten für Aussenhandel*, Berlin, 8. Oktober 1942.

38) *Schweizerische Handelszeitung*, 8. 10. 1942.

39) *Neue Zürcher Zeitung*, 17. Januar 1943.

40) *Financial News*, London, 14. 1. 1943.

41) *Financial News*, London, 19. 1. 1943.

アメリカにおける BIS 批判

1943年の春、出版界における BIS 批判はアメリカにも広がった。1943年5月19日フランス人ジャーナリスト、アンドレ・ジェラウド Andre Gerud が『ニューヨーク・タイムス』で「ベルティナックス」Pertinax というペンネームで BIS に対する正面攻撃を発信した。この記事の中で彼は BIS を分析し次の結論に達する。「それは結局のところドイツ第三帝国の利益において機能している組織であり、さらにいまやドイツ・ライヒスバンクによって敗れた戦争後の『救命ボート』として選び出されているのだ。」これに対し BIS 前々総裁レオン・フレーザーは、ウォール・ストリートとワシントンで広く議論され出したこの「ベルティナックス・ストーリー」を『ニューヨーク・タイムス』への投書の形を以って反論した⁴²⁾。

やや経って1943年11月24日になると『ニューヨーク・タイムス』は、アメリカ合衆国財務省次官ハリー・デクスター・ホワイトとの長大なインタビューを掲載した。BIS 敵対者のホワイトは当時まさしくブレトン・ウッズにおける連合国世界通貨会議の準備に携わっていたが、戦後世界の新たなすべての将来構想の中で BIS の役割を認めないと語った。

これに対しフレーザーは、ホワイトへの反撃を開始した。1944年のはじめにフレーザーは『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』のなかで、戦後 BIS を世界通貨制度の再建のために利用し、ブレトン・ウッズにおいて新たな機関を設立する代わりにするという提案を発表した⁴³⁾。ホワイトはフレーザーの提案にコメントして語る。「ドイツ派遣の BIS 幹部は感じ良く礼儀正しくふるまう。それはかれらがこの銀行によりつつ第三帝国の没落を超えてその後も金融権力を握り続けることを希望しているからである。付け加えれば、わが国の若者が戦場でドイツ人によって大量虐殺されている時に、この国際決済銀行 (BIS) ではアメリカ人の総裁がドイツ人と業務を行なっているのでは

42) MC, Brief von Leon Fraser an Frau McKittrick, 26. Mai 1943.

43) New York Herald-Tribune, 24. 7. 1944.

る。」ホワイトとフレイザーの撃ち合いの後1944年のはじめにはアメリカ中の無数の新聞とラジオ局が BIS のテーマを取り上げるようになった。

総じてアメリカにおけるネガティブなメディア決算は BIS に対して大きな損害を与えた。アメリカ上院の銀行・通貨委員会の1944年4月22日のやり取りでフレイザーは、BIS は戦後国際的な為替相場の安定の目的のために利用され得るかと質問されて、明瞭に否と答えざるをえなかった。フレイザーは言う。「政治を忘れて純粋に技術的に判断すれば、BIS は国際的な通貨協力の良い出発点になり得るだろう。しかしながらこの機関は汚物によって汚され、もはや新たな世界を再建するには適さないだろう。(中略)ブレトン・ウッズ構想が実現されるべきとすれば、私はあなたがたに、現在 BIS で働いている多くの専門家が彼らの中央銀行から新たな機関である IMF と世界銀行へ派遣されるだろうことを保証する。」

ブレトン・ウッズ会議における BIS 解散決議

「本日の我々の議題はこの場で即座に分かるよりもより意義深いものになるでしょう。私はあなたがたに特別の注意をすることを勧めたいのであります。」⁴⁴⁾ こうした言葉を以ってアメリカ合衆国財務省長官ヘンリー・モーゲンソー、Jr. は1944年7月18日にブレトン・ウッズにおける連合国世界通貨会議への17人の合衆国派遣団を前に語りかけた。つづいて彼は財務省次官のハリー・デクスター・ホワイトに短くうなづきかけて文案を読み上げはじめた。

「連合国の世界通貨会議は国際決済銀行 Bank for International Settlements の可能な限り速やかな解散を勧告する。」⁴⁵⁾ この文章は、数日前にノルウェーの派遣団団長のヴィルヘルム・ケイルハウがホワイトの求めに応じて会議総会に提出した決議提案の一部であった。モーゲンソーとホワイトは BIS に対する

44) The Minutes of US-Delegation in Bretton Woods, Morgenthau-Diaries, 18. 7. 1944, Roosevelt Memorial Library, Hyde Park, N. Y., G. Trepp, a. a. O., S. 138

45) Ebenda.

最後の戦闘を開始した。

モーゲンソーの BIS 解散の努力はニューヨークの金融エスタブリッシュメントに対する彼の闘争と密接に結びついていた。このことはニューディール派ジャーナリストでホワイトと友好関係にあった I. F. ストーン I. F. Stone のひとつの論説の引用が良く示している⁴⁶⁾。ストーンは当時ニューヨークの進歩派夕刊紙 *PM* のために働いており、この新聞は発行部数は少なかったがアメリカ合衆国東海岸のオピニオンリーダーの世界では高い評価を受けていたものであった。「大銀行家たちが国際通貨会議に対して画策を巡らしている」とのタイトルの下でストーンはアメリカ合衆国財務省とウォール・ストリート諸銀行とのブレトン・ウッズ会議における力関係を分析し、そこで BIS の位置づけも行っている。「ウォール・ストリートは現在ナチに支配されている BIS を将来の世界銀行として生き残らせようとしている。そしてそれに加えて英米の二国間金融協定をその補完物として締結しようとしている。これによってニューヨークとロンドンの連合した金融エスタブリッシュメントは戦後の国際的な通貨政策をかれらの意味において誘導しようとしており、国際的な信用機構のコントロールを通じての社会的経済的な改革を彼らにとって望ましくないものとして阻止しようとしているのだ。この試みにおける主要な役割を演じているのは、ファースト・ナショナル・バンク・オブ・ニューヨーク頭取で前の BIS 総裁であるレオン・フレイザーである。ファースト・ナショナルによって率いられているアメリカ合衆国の銀行グループは敵によって支配されている BIS に現在も相変わらず参加している。この英米銀行連合の推進者で黒幕は、ウォール街の最大法律事務所サリヴァン&クロムウェルのパートナーであるジョン・フォスター・ダレス John Foster Dulles であり、この法律事務所そのものが戦前期多数のナチ企業の法律顧問であったのだ。ウォール・ストリートは計画されているブレトン・ウッズ機関を事実上異口同音に拒否しており、一貫して国際通貨機関 (IMF) と世界銀行の設立をアメリカ議会でぶち壊そ

46) *PM*, New York, 16. 7. 1944.

うと試みているのである。ロンドンではブレトン・ウッズ機関反対派は保守的な銀行家の小さなサークルに限られているが、かれらは金本位制を悼んでおり、政府が計算された財政赤字によって完全雇用を取り計らう考え方を妨げようとしている。イギリスの保守派は彼らのはなはだしい敵、金本位制の悪名高い反対者の J. M. ケインズが現在イギリス大蔵省の主任エコノミストになり、ブレトン・ウッズ会議のイギリス代表に昇進するのを傍観していなければならなかった。ケインズの国家財政支出による完全雇用の為の対恐慌的経済政策は金本位制とは両立しない。上記の銀行家たちが計画されている IMF および世界銀行を阻止することに成功し、同時に貨幣政策に関する英米の銀行コントロールを持った金本位制の確立に成功すればそこからは両国において保守的な社会政策が出てこざるをえない。保守的な英米金融界にとっては世界銀行としての BIS の利点は、彼ら（銀行界）がこの機関をコントロールできるという点にある。他方ブレトン・ウッズ機関は連合国の諸政府によってコントロールされるべきものとしてあるのである。⁴⁷⁾

I. F. ストーンの BIS 批判の主要点はナチ協力ではなく、アメリカ合衆国財務省の国内政策上の主要敵である金融エスタブリッシュメントの道具として BIS が使われていることであった。それ以上にニューヨークのアメリカ最高金融界は基本的にフランクリン・D・ルーズベルト大統領の民主党政権政策全般の敵対者であった。1933年の在職以来財務長官モーゲンソーはアメリカの金融部門を一層強く政府の管理下に置くことを疲れを知らない精力で推進してきた。彼の銀行及び証券市場に関する新しい法律は広範な通貨業務を規制し、大銀行の利益可能性を感じられるほどに制約してきた。ルーズベルト大統領が1941年12月にモーゲンソーを戦後のアメリカの国際的通貨政策の計画のための責任者につけて以降、彼は国家管理の原則を当然のことながらこの領域に拡大した。モーゲンソーの目標は「世界金融の中心地を民間銀行が支配するロンドン及びニューヨークから合衆国財務省のあるワシントンに移転することであ

47) PM, New York, 16. 7. 1944.

る。』⁴⁸⁾ 計画されたブレトン・ウッズ機関はモーゲンソーによってアメリカ合衆国が支配するグローバルな国家介入主義の意味での国際的な「超財務省」として考えられていたのである。

ブレトン・ウッズ会議における17人のアメリカ代表団は、民主・共和両党の政治家、財務省と国務省の官僚と技術的専門家、それに連邦準備制度のそれから成っていた。こうした構成の中にあってはモーゲンソーは最初から BIS を計画されているブレトン・ウッズ機関の怠業者であるという悪評で以って解散への賛成多数を得るように計算することはできなかった。アメリカの金融エスタブリッシュメントに伝統的に近い共和党の政治家やネッド・ブラウンのような銀行家は彼に従わないだろうし、他方銀行を弱めようと欲しないいくつかの技術的専門家は棄権するかもしれない。アメリカの代表団の多数を BIS 解散の必要性について納得させる為には批判の主要点は BIS の「ナチ協力の拠り所」という非難に置かれねばならなかった。そして1944年7月18日にブレトン・ウッズでモーゲンソーが BIS に対して行おうとしたのはまさしくそこであった。

彼は次のように意思表示を始める。「私は BIS を長年にわたって観察してきた。この銀行は確かに特別に重要ではないが、しかし過去において我々がここで規制しようと思っているのと同じ国際的な通貨問題を規制することを試みてきた。BIS はドイツ人に支配され、ふたりの前の BIS 総裁であるフレーザーやバイヤンのような人々といっしょになってやってきたが、私は、自分が BIS をナチスの道具であると感じてきたことを強調したい。ドイツのプラハへの進軍の後チェコスロヴァキアの通貨準備の金が BIS の協力によってドイツに略奪されたことを忘れてはならない。』⁴⁹⁾

モーゲンソーはさらに続ける。「私は次のように主張したくはない。フレー

48) John Morton Blum, *The Morgenthau Diaries, Years of War*, Boston 1967, p. 276.

49) The Minutes of U.S. Delegation in Bretton Woods, *Morgenthau-Diaries*, 18. 7. 1944, G. Trepp, a. a. O., S. 141.

ザーはドイツの方向に忠誠心を持っているにもかかわらず良いアメリカ人であるなどとは。同様の忠誠心を私はバイヤンにも見る。かれはブレトン・ウッズ会議におけるオランダの代表団になっている。また同様のことは現 BIS 総裁のトーマス・H・マッキトリック及びヨーロッパの諸中央銀行家たちのある種の要素にも言えることである。この会議の総会で BIS の将来がアメリカ合衆国の明瞭な立場の表明なく語られるとすれば、ドイツ人はここから次のように結論するであろう。バーゼルにおいては戦後もすべてが以前のままとどまるだろうと。まさしくこの継続性がヤルマル・シャハトやヴァルター・フンクのようなライヒスバンクの人々がすべての希望の拠り所を置いている所なのだ。わたしは、我々は BIS の解散決議を我々の心理的な戦争指導の観点からも支持しなければならないと考える。我々のヨーロッパ向けの短波放送プログラムで我々はこの会議後の BIS の存続の正当性をもはや説明できない。⁵⁰⁾ モーゲンソーが言明を終えた後今度はアメリカ銀行家協会の代表ネッド・ブラウン Ned Brown が代表団への短い意思表明を行った。財務長官とは反対にブラウンは解散決議の撤回を支持した。

BIS 解散決議への賛成、反対の両立場表明があった後で、モーゲンソーは会議代表団にそれぞれの個人的な立場表明を求めた。その際少なくない面々がこの問題の政治的な背後関係について能力以上のものを求められていることがわかった。次のエピソードは如何にして政治戦術家モーゲンソーがためらう人を圧力の下に置くことに成功したかを明らかにしている。マーベル・ニューカマー Mabel Newcomer は、経済学の教授でありアメリカ代表団の中の唯一の女性であったが、BIS 解散決議について立場を打ち出す能力がないと感じていた。それに対してモーゲンソーは質問した。「あなたのところでマッキトリック氏の娘さんが勉強してはいませんか？」ニューカマー女史が肯定すると、モーゲンソーは言った。「彼女はしかし BIS に対して非常に明瞭な態度を持っていると思いますよ。このことをわたしは同じくあなたのところで勉強してい

50) Ebenda.

る私自身の娘から聞いて知っています。マッキトリック嬢がどんな考えを持っているかをわれわれに話していただけますか？」満場の大笑いの中でマーベル・ニューカマーは言った。「はい、彼女は BIS の解散の為の何かがなされて直ちに父親が帰ってくることを望んでいるのです。」それに対してモーゲンソーは補った。「マッキトリック嬢のこの I.F. ストーンの BIS 批判論説についてのコメントも大変感じが良いものです。彼女はストーンは正しく、父は間違っていると思うと言っていますよ。」⁵¹⁾

質問の輪が上院議員チャールズ・トービー Charles Tobey にまで至った時モーゲンソーが質問した。「上院議員、あなたはこの会議で何か新しいことをお聞きになりましたか？」トービーは上院における共和党反対派指導者で彼の意見はとりわけ重要だった。「はいもちろん、財務長官。あなたがここで言われたことを聞いた後でわたしは BIS についても私の考えを変えました。ナチスに対する私の憎しみは大変大きいのでわたしは BIS の解散決議を今は支持します。私の良い友人であるネッド・ブラウンの反対にも関わらずです。わたしは BIS について明瞭に反対しない人はナチスを支持していると思います。」⁵²⁾

トービー上院議員が陣営を転換した後では合衆国代表団のなかでの二番目に強力な BIS 同情派にとってはただ急ブレーキをかけることしか残されていなかった。国務省次官のディーン・アチソンが言った。「BIS の解散は外交政策の問題です。それゆえ無条件にワシントンにいる国務長官のコーデル・ハルもまたこれについて耳にする必要がある。私が知る限りでは、ハルは1943年はじめの BIS 総裁マッキトリックのワシントンへの訪問の際に彼にバーゼルへ帰任することを要請したはずで、コーデルに相談したい。」これに対してモーゲンソーが答えた。「わたしは彼が何を言うかかなり確信がある。直ちに国務長官に電話してみよう。」

51) Ebenda.

52) Ebenda.

午後にモーゲンソーは代表団に対し彼の電話でのやり取りについて報告した。「わたしはコーデルに決議を読んで聞かせ、また代表団の意見分布も伝えた。彼は BIS の解散に同意した。私はまたどのように BIS 総裁マッキトリックに決議について知らせるべきかを彼に尋ねた。彼は、マッキトリックは新聞でそれを読むのがよからう、と言った。」こうして合衆国代表団の全員がノルウェー代表によるブレトン・ウッズ会議総会での BIS 解散決議を支持することに同調した。BIS に友好的なネッド・ブラウンとディーン・アチソンもそれ以外に選択肢はなく、同様に決議に同調した。

これによってモーゲンソーは重要な中間目標に到達した。しかし総会における44ヶ国代表団による解散支持までにはまだ道のりがあった。ノルウェーの解散決議への最重要の代表団の態度を調査する為にモーゲンソーは外国資産管理局長のオーヴィス・シュミットに当該観測を行なうことを委託した。この際シュミットは多数が解散を支持していることとともに二国の解散反対者を確定した。イギリスとオランダである。

フランスの代表団長のピエール・マンデス＝フランスは BIS の解散に賛成であった。フランス銀行が1930年以来ヨーロッパの中央銀行間協力の主要な柱の一つであり、バーゼルにずっと総支配人の一人を置いていたにもかかわらずである。マンデス＝フランスは第一級のド・ゴール派のひとりでバーゼルのロジェ・オブワンには何らつながりを持っていなかった。それに加えて彼はフランスの再建への10億規模のアメリカの支援を希望しており、アメリカ財務長官というはっきりした BIS キラーと仲違いすることを欲しなかったのである。ベルギーの代表団長のカミーユ・グットも BIS の解散に賛成であった。オランダのバイヤンが彼の考えを変えさせる為に最大限の努力をしていたにもかかわらずであった⁵³⁾。ブレトン・ウッズ会議でのスターリンの代表者金融コミサールのシュテパノフ Stepanov は当然のことながら BIS の解散を喜んで支持していた。ソヴィエトは BIS をその設立以来つねに「反動的な金融資本の

53) MC, Brief von Marjorie McKittrick an McKittrick, 4. 8. 1944.

世界的規模での共謀のセンター」として攻撃していた。この会議の前哨戦としてモスクワの党機関紙『プラウダ』から労働組合新聞『トルード』に至るまで反 BIS キャンペーンを独自に行なっていた⁵⁴⁾。また雑誌『戦争と労働者階級』は詳細な BIS 批判を掲載し、そこでは BIS は中立の外套の下でヒトラー・ドイツを支持していたと書いている⁵⁵⁾。

解散への反対者

ブレトン・ウッズでの BIS 解散への最も熱心な反対者はオランダ代表団長のヴィルヘルム・バイヤンであった。オランダの亡命政権の代表者としてしかしながらかれひとりでは解散決議をブロックする為には比重が少なすぎた。このことは BIS のもう一人の同情者イギリス代表団の中のイングランド銀行代表であるチャールズ・グンストン Charles Gunston について言うことはできなかった。グンストンは戦争前のベルリンにおいてはイングランド銀行のライヒスバンクとの連絡役の人間であった。彼はヒトラーの賛嘆者のひとりで1934年の休暇にはドイツの労働奉仕施設で過ごしたことがある経験の持ち主であった⁵⁶⁾。

かれがイギリスの代表団長 J. M. ケインズをノルウェーの BIS 解散決議への支持から離して置くことができる限りでは、BIS は解散され得ない。というのも4つの連合国イギリス、アメリカ、ソヴィエト連邦、及びフランスが共通の支持をしない限り総会における決議はチャンスがないからである。

ケインズは、彼自身が BIS に大きなシンパシーを抱いていたがゆえにグンストンの意見を退けなかったのではない。逆である。かれの有名な恐慌期における国家介入と低い利子率による雇用創出の理論はイングランド銀行や BIS の主任エコノミスト、ペル・ヤコブソンが代表していた古典的な経済リベラリ

54) *Pravda*, 13. 5. 1944 und *Trud*, 27. 5. 1944. in G. Trepp, a. a. O., S. 145.

55) *Der Krieg und die Arbeiterklasse*, Moskau, 15. 4. 44.

56) David Marsh, *Die Bundesbank*, München 1992, S. 165f.

ズムに対するアンチテーゼである。イングランド銀行総裁ノーマンにとっては大変不満であったのだがケインズは戦争勃発後イギリス大蔵省の顧問となり、そして1942年秋以降ホワイトとともに精力的にブレトン・ウッズ会議の準備を進めてきたのである。彼らのそれぞれの国の経済的な利益を出発点として両者は戦後の世界通貨秩序を如何に規制するか計画を作っていた。軍需供給によってアメリカ合衆国への大債務国になったイギリスの経済的利益は債権国のアメリカの利益とは対蹠的になっていた。こうした中で終局的にはホワイト案がケインズ案に対してブレトン・ウッズの制度の基礎となったのである。

ノーマン総裁及びイギリスの最高金融界の広いサークルは計画されている国際的金融機関 IMF と世界銀行にアメリカにおける所在地も含めて批判的に対処していた。世界準備通貨としてのイギリスのポンドのアメリカ・ドルへの交替については彼らはロンドンの国際金融センターの弱화를恐れた。こうしたイギリス金融界の圧力のもとでイギリス首相ウィンストン・チャーチルは世界通貨会議の開催を数か月もためらった。ノーマン総裁が1944年4月に健康上の理由で退任せざるをえなくなり、カッター卿 Lord Catto が大蔵省からイングランド銀行のトップに就いた後初めて、ケインズはイギリスの戦時内閣にブレトン・ウッズ会議への準備を最終的に進めることを説得することに成功したのである。

イデオロギー的に見れば、イギリス人ケインズはイングランド銀行よりアメリカ財務省の首脳の方により近かった。ケインズの経済理論もモーゲンソーのニューディール金融政策も国家に経済における決定的な参加権を与えている。違いはもちろん、モーゲンソーは均衡財政を支持しており、ケインズは財政赤字による対循環的な投入を求めている点である。こうした精神的な近似性をモーゲンソーはケインズに BIS 解散決議への最終的な支持を説得する為に利用した⁵⁷⁾。

ケインズが BIS 解散者の陣営に転換した後でイングランド銀行代表者は損

57) John Morton Blum, *op. cit.*, p. 268.

害をある程度制限することを試みた。彼は決議案の文章の修正を提案し、BISはIMFおよび世界銀行が仕事を開始した後に始めて解散されるべきとした。モーゲンソーとホワイトはしかしながら「できるだけ最も早い時点」という硬い表現に固執した。ケインズはついに「できるだけ最も早いBISの解散」に同意した⁵⁸⁾。

これを以ってモーゲンソーとホワイトはイングランド銀行におけるまた英米の金融エスタブリッシュメントにおけるBISの強力な友人たちのすべての抵抗に対抗して彼らの目的を達成した。世界経済の為の「進歩的なニューディール」のしるしの下にBISは「ナチ協力」を根拠として解散されることになった。しかしまもなくモーゲンソーの勝利はいわゆる「ビュロスの勝利」(多大の犠牲を伴う勝利)であったことが明らかとなる。決議は実行されなかった。3年後モーゲンソーはもはやアメリカ合衆国財務長官ではなく、ホワイトは死去し、そしてBISは復権していた。

58) *ibid.*